

2017年3月19日

## 福音書からのメッセージ

サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。  
(ヨハネによる福音書4章7節)

サマリアの町にある井戸のそばに、イエス様は座っていました。正午ごろのことです。そこへ、一人の女性が水を汲みに来ます。この地域で正午に水汲みをするのは、あまりなかったようです。なぜならばその時間帯は大変暑く、体力を浪費するような行動はできるだけ避けていたからです。しかしこのサマリアの女性は、正午に水汲みに来ました。

当時水汲みは、女性が主におこなっていたそうです。朝の涼しい時間帯に水汲みに来たならば、井戸の周りではたわいもない会話が繰り広げられていたでしょう。人のうわさ話や陰口なども、日常的にあったと思います。この女性は、その輪の中にいたくなかったのかもしれませんが。

彼女には五人の夫があったと書かれています。当時の社会の中で女性が自分の意思で夫をコロコロと変えていくことは難しいことです。夫が彼女を排除したと考えた方が自然です。夫が亡くなったということもあったかもしれませんが。しかし彼女が子どもを産まないから、他に魅力的な女性があらわれたから、彼女と一緒にいることが嫌になってしまったから。様々な理由をつけて、男性が一方的に彼女に「出て行け」と告げた可能性が高いのです。彼女に罪があろうとなかろうと、何度も捨てられ、裏切られたのかもしれませんが。

そして周りの人にレッテルを貼られた彼女は、自分の存在を消すように、自分がいることを悟られないように、人がいない時間帯を選んで行動したのでしょうか。そこにユダヤ人であるイエス様が彼女に話しかけます。「水を飲ませてください」と。



何げない会話です。しかしここで、イエス様は二つのタブーを犯しています。一つは男性から

見知らぬ女性に話しかけるということです。まして教師だと見られていたイエス様が、公の場所で女性と話すなど、あってはならないことでした。もう一つは民族の問題です。ユダヤ人とサマリア人は敵対しており、ユダヤ人がサマリア人に話しかけることもありえないことでした。

イエス様は水をくださいと言われました。しかし同時に、生きた水の話もされます。水を欲しながら、水を与えようと言われるその姿は、一見すると矛盾するようにも思えます。しかし、イエス様が覚える肉体的な渴きをいやす水と、心の渴きを満たしてくれる生きた水とは本質的に違うのです。肉体の渴きをいやす水を持つ女性、その女性の心は渴いていました。イエス様はそのことを何よりも知っていました。二人の会話は、イエス様が彼女の渴きを知り、女性という、またサマリア人という垣根を超えてその人に関わられたことから始まったのです。

どんな人にでも、神さまは関わってくださいます。どんなにつらい生活をし、人の目を避けて生きていても、イエス様は必ず見だし、生きた水を与える約束をしてくださるのです。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>